

美術の窓(53)

絵画の宇宙像について
—雪舟と西洋の近代画家たち—

大和文華館館長 吉川 逸 治

当館で今秋に開催した特別展『雪舟』は大好評の裡、11月6日に終了いたしました。この展覧会で久しぶりに雪舟の名作の数々に接する機会を持ちえたことは私にとりまして大いなる幸せでありました。今度、あらためて雪舟を拝見しますと、やはり在明中の作品「四季山水図」四幅対に一番惹かれますのは、西洋画を見なれてきたせいかもしれません。とにかく雪舟が一番中国の画法に忠実に描いたものが、自から西洋画に見なれた私の眼に親しみをもって観賞出来たのでしょうか。

雪舟の芸術の特徴は禪林の冥想的環境を一步出て、新しい近世の現実社会に適応しようとしたことでしょうか。雪舟が、彼我の絵画観の相違を知悉して、処することの必要を晩年、弟子の宗淵に書きのこしているのは印象的な出来事です。中国の絵画思想は、既に多年、三次元の処理に習熟しているのに対し、我国では依然として筆線にたより、二次元の処理に基礎を置く慣習から解放されていない点を指摘しています。まさに「天ノ橋立図」は、老雪舟が後世に遺した最後の三次元処理の絵画の範例でありました。

雪舟の絵画観による山水図の世界とは具体的にいかなるものであったのか、大いに興味もたれるところではありますが、それがやはり禪的な世界観と何処かで深く関わっていたのではないかと想像されます。この想像をもう少し拡大してみますと、雪舟の山水図とは東洋における仏教芸術が成し遂げたいわゆる人間を超絶した大自然(宇宙)の構想にまで関わってい

くのでありましょう。この人間を超絶した大自然(宇宙)の構想は、ひとり東洋のものだけではなく、私が学んだ西洋のキリスト教美術においても同等の意義をもつ課題であり、キリスト教中世が西洋美術の伝統の上に与えた最大の寄与とも言えるものでした。例えば西洋の中世美術の主導的地位にあった建築は、この宇宙的構想のために終始努力してきたのです。この宇宙像が建築の抽象的構成から、具体的に絵画に移行するのが14・15世紀で、まさに雪舟の生きた時代と重なる訳ですが、この時代の西洋美術の一大課題でもあったのです。

ここで雪舟から離れて、ヨーロッパ美術における絵画の宇宙像について少々ふれてみましょう。絵画における宇宙像に関しては、南はイタリア、北はフランドルが15世紀になって普遍的な骨格を与える科学的遠近図法の成立に努力しますし、同じ頃オランダのネーデルランド画派は緻密な写実描写の規律と油彩画法の技術がこの宇宙像の具体的実現に貢献します。教会堂のオルガン音楽で多声器楽が熟成されるのと同時代なものも注意すべきところでは、それをレオナルド・ダ・ヴィンチが総合して完成させたのです。このように15世紀の美術家たちが宇宙像を建築から絵画に導き入れたとき、建築の大規模な抽象的象徴に対して、新しく絵画のなかで形成されるものは、額縁で区切られた場面に、消失点を中心にまとめ上げられる線的遠近図法の骨格をもって、画家個人の眼前に繰りひろげられる自然や人間社会の光景そのままを示

すかのように、微細な明暗や色彩を整えて、描きだすという具体的な、個人視覚の映像としての「宇宙像」だった筈です。個人的視覚の単位の上に築き上げられる宇宙像というのが基本形式となったということです。たとえ、引続いて壁画の大製作も重要な地位を占めていたとはいえ、この壁画も、これまでのように建築的秩序に従属して、もっぱらそこから構図の基礎と規則を授かるというのではなく、額縁のごとく、個人的視覚の統一した映像の性格をもとにして描かれることになったのです。この新しい個人的視覚の芸術が、15世紀以来、今日まで続く西洋絵画の基本的主流なのです。

そして、ルネサンスの人間の自覚とは、絵画の上では古代復興による美しき誇らかなる人間像の形成と共に、さらにその枠をなすこの個人的視覚像の確立という新しい課題を次第に強調することに反映しています。人間の自覚とその主張とは、こうしてまず個人的視覚像として確立されたのです。

15世紀を通じて、この人間像と宇宙像の近世的形成がひとまず成し遂げられる時、そこで20世紀の近代美術を作り出す三つの要素が現われています。一つは「観照の芸術」という性質、第二は「写実主義(自然主義)の進展」、第三は「人間についての理念の進展」ということで、相互にこれらは関連し合い、そしてこの三者の進展が自ら、ルネサンス古典美術の伝統を崩壊させて、近世美術の出現を促がすパロック美術なり、マニエリスムの美術が現れてきます。さらになると、レオナルドの役割はすでにミケランジェロの時代があらわれ、さらに絶対王制の宮殿美術へと繰りひろげられます。

最初に挙げた「観照」の絵画とは、雪舟の絵画世界とも大いに関係し、興味もたれるところなのですが、既に西洋古典美術と対照的な性質を含んでいます。眼前の対象を凝視して、そこに光や色彩

の微細な調子を緻密に観察しながら、画布の上に細かいタッチを置いて作画する印象派の芸術は、この「観照の絵画」のもっとも徹底した例であります。例えば、モネの風景画は、外界の自然とこれを凝視するモネの精神の緊張した活動状態との合一した映像であって、主客未分離の純粹知覚、あるいは純粹視覚の状態をそのまま反映しているものだといえます。ですから、印象派の芸術を純粹知覚の芸術と呼んで、人間的理念、及び感情を凝結させた人体像を表現の中心とする絵画芸術と区別します。人間像が描き出されていても、既にファン・アイクの芸術は、この観照の絵画としての性質を強く打ちだして、古代神話や歴史物語を語る古代浮彫とか、叙事的な中世宗教画に連綿と続けられてきた物語的要素が殆んど消滅しています。レオナルドの「モナ・リザ」も、ジョルジョーネの「田園奏楽」もこういった観照の絵画としての深さにその魅力が蔽われています。

またグレコは、この個人的視覚の観照の激しさで、宗教画の構図を一新して、自分の境地をひらき、近代的な魅力を湧き立たせました。ティツィアーノやレンブラント最晩年の生々しい色調が激しく波立つ筆触で輝く「印象派的」作品も、老大家が大様式の観念から解放されて、大胆にこの純粹な個人的視覚の境地に身をゆだねて制作した結果でありましょう。近代絵画は、このようにまず第一に個人的視覚の観照の芸術という性格で貫かれねばならなかったのです。

私はこのたびの特別展「雪舟」で、その名作を目前にして、30数年前に草した一文、「近代絵画への道—西洋美術の伝統と近代絵画—」(『近代美術への天才たち』新潮社、1964年刊、に収録)を思い出し、そこで取上げた「観照の絵画」の問題を、強く、若々しい雪舟像と重ね合わせて回想させられた次第です。老学者の唐突な思いつきで無ければ幸いです……。

季刊 美のたより No.109

平成6年11月11日

発行 大和文華館